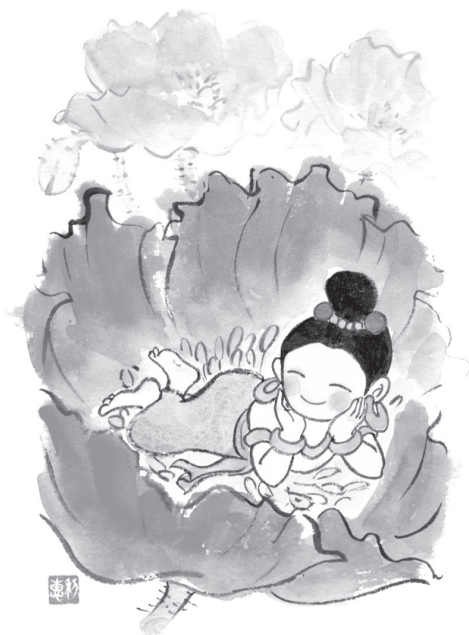



心のポケットに  
～言葉の花束を～






---

私は何に見えますか	4
それぞれの光を放っている	6
待たれている身と知る	8
「ふたたび」はないと口ずさむ	10
あてにならない私の心	12
雨やどりをさせられる強さ	14



---

私のために生まれてくれた人	16
へい開山にお会いできた	18
病気を拝みながら生きる	20
私のために用意されている	22
悲しみの種子を抱いたまま	24
何を信じ何を礼拝しているの	26
日常の小さな感動の連続	28





## 私は何に見えますか

蟻よ

その草が

木に見えるか

その石ころが

岩に見えるか

蟻よ

私は

何に見える

【鈴の鳴る道】星野富弘著（偕成社刊）

不自由な手に代えて絵筆を口に咥え、

見事な絵と、心にずっしりと響く詩を書

きつづけてくださる星野富弘氏。

人間の心の奥を覗きながら、氏の言葉

はどうしてこんなに優しいのでしょうか。

私はこれまで蟻の身になって物を見た

事は一度もありませんでした。

小さな小さな蟻の目に写る私は、人間

でしょうか……。

いいえ、鬼か蛇蝎じやくつに違いありません。

蟻の悲鳴に気づかず、幾たび蟻を踏み殺

したことでしよう。

この詩に出会ったとき、私は身の回りの全てのものに尋ねたくなりました。

犬や猫や小鳥たちに……。

「私は何に見えますか？ 私は今まで小さな生きものを殺したり、苛めたりはしていませんよ、優しい人間に見えていますか？」

何と、傲慢な、何と不遜な私の姿でしようか。

小鳥を食したことはありませんが、鶏も卵も食べています。牛も、豚も、お魚も……。

たくさんのいのちをいただいて生かされていきます。

もし、野に咲く小さな花が、私を人間に見てくれるなら、それは仏法あに遇えたから……それだけです。

この救いようのない私を、阿弥陀さまはじつとみていてくださっています。その眼まな差しのなかに、確かにこの私があります。

大悲のなかに、大慈悲のなかに、確かにこの私があります。



## それぞれの光を放っている

光る 光る  
すべては 光る  
光らないものは  
ひとつとしてない  
みずから  
光らないものは  
光を受けて  
光る

『詩集 念ずれば花ひらく』坂村真民著（サンマーク出版刊）

人びとの心に夢や願いの花を開かせて  
くださる仏教詩人・坂村真民氏。全てのこ  
とがらは、氏の五感を通し「詩」という乳  
となつて、溢れ、ほとぼしっています。  
その美味さ、その芳しさ。崇高なまで  
の仏心の響きに感動するばかりです。  
自ら光ることなどなき身の私が、仏智  
の光に照らされます。

二年前、友人数名と、ボランティアの  
影絵サークルを作りました。幼い子ども  
たちに、美しい話や昔話を出勤公演して

います。

サークルを結成したとき、そのサーク  
ル名を皆で考えました。

しかし、なかなかいいアイデアも出ず、  
とうとう私に一任されました。誰もが  
覚えやすく、忘れられない名前……。悩  
みました。

そして、決まりました！

『信号機』と名付けました。

皆が毎日見ているもの、使っているも  
の、無くては困るもの……と考えたので  
すが、もう一つは「信号機」の色です。

『仏説阿弥陀經』の中の「青色青光、黄

色黄光、赤色赤光、白色白光」です。

影絵を見てくださる子どもたちが、そ  
れぞれの光を放っていることを忘れない  
で演じようと思ったからです。

思えば、私が毎日出会っている少年少  
女たちは、思春期の日々を悩み、苦しん  
でいます。

しかし、みんなかけがえのないのち  
が光り輝いています。

彼らに出会う時、同じ光に包まれてい  
る私の喜びも、大きく広がっていきます。